

「言った」「言わない」はいつの世でも争いの元になる。子どものケンカや夫婦の争いごとならまだしも、政治の表舞台で大問題になることも間々あるのだから、実に悩ましい。つい最近も、考えさせられる出来事が二つあった。

「放射能つけちゃうぞ」。鉢呂吉雄前経済産業相はこのような「失言」から、就任わずか九日で経産大臣の辞任に追い込まれた。確かに閣僚が、防災服の袖を記者の服になすりつけるそぶりをしながらこう言ったとすれば、政府の対応のまずさのせいで放射能汚染に苦しむ人々を顧みない、とんでもなく愚かな言動だ。それに、福島県外に避難した子供たちが受け入れ先でいじめに遭っているとの話もある中で、その悲しい現実を助長しかねない許し難い発言である。

だが、鉢呂氏が本当に「放射能」という言葉を使ってこう言ったかどうか、真偽は定かではないという。そもそも、報じられている発言が「放射能つけちゃうぞ」「放射能を分けてやるよ」「放射能をうつしてやる」などと、マスコミ各社によって異なっていたのだから、本当かどうか怪しいと言えは怪しい。鉢呂氏が帰宅した際の、議員宿舎入り口での非公式な「オフレコ」取材だったこともあり、検証するのは簡単ではないのだが、鉢呂氏自身は辞職後、各方面で「放射能と言った記憶はない」と主張している。

ただ、本当に言っていないのであれば、辞める必要はなかったはずだ。鉢呂氏は、にもかかわらず辞めた。まもなく始まる臨時国会で野党の集中砲火を浴びて、発足間も

失言か虚言か

ない野田佳彦政権が立ち往生しかねないことを憂慮した、と説明している。マスコミが大騒ぎして野党の反発が収まらなくなったので、「言ったか言わなかったか」は、もはやどっちでも良くなってしまうのだろうか。言っていない、と主張しても聞く耳を持つてもらえないと思ったのだろうか。

しかし、言葉を操ることで人心をつかみ、動員し、権力を司るのが政治家であるとするれば、言葉にこだわらなくなつた時点で、「政治家失格」である。辞める前に「言っていない」と堂々と主張して、マスコミに反論すべきではなかったか。そうすれば、猪突猛進しがちな報道のあり方にも一石を投じることができたはずだ。今さら「本当は言っていない」などと吠えても虚しいだけであり、辞めてしまった以上、多くの人は「やっぱり言ったんだ」と信じ込んでいる。

日に行われた、道と北電の打ち合わせの席での「言った言わない」だ。北電側は、道職員が「意見募集には反対意見が多いので、反対派の主張を打ち消す意見も欲しい」と言ったと主張し、これがやらせを誘発したという。これに対し、当時の道の課長は「様々な角度の意見が必要」などと発言したが、趣旨や意図が違う」と、やらせを否定した。

道がつくる第三者検証委員会は、この打ち合わせの席での「言った言わない」を調査する。現時点では、当時の道側のメモや録音テープが見つかっていないため「言ったか言わなかったか」をはっきりさせられず「状況証拠」の積み重ねで決着をつける可能性もある。

ただ、当時の道課長がこだわる「趣旨や意図が違う」という主張は、いささか無理がある。「自分の言ったことが相手に正確に伝わっていない」「言いたいことと違って受け止められた」というのは、当たり前であり、それこそが言葉によるコミュニケーションの宿命である。そんなことは大の大人なら誰でも分かっているはずで、とすれば、この道課長、うそをついていると言われても仕方がないだろう。

それでも道の第三者検証委員会が堂々と「シロ」判定を下せば、それこそ結論ありきの御用委員会であり、うそを追認することになる。鉢呂氏のように「言っていない」のに「言った」こととして黙認するのも悪いが、「言った」ことを無理矢理「言っていない」ことに仕立てる方が、もっと罪深い。

賛成意見を提出するよう促した、と指摘していた。ところが、当の道職員は記者会見を開いて「言っていない」と反論。高橋はるみ知事もこの職員の言い分を支持し、北電に対抗して「第三者検証委員会」を設置。事実解明を進めて白か黒か、決着をつける事態にまで発展した。

問題になっているのは二〇〇八年七月八